

新聞4コマ漫画が描く野田佳彦首相（中編-1） 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2011～2012

Prime Minister Yoshihiko Noda in Newspaper Comic Strips (Part 2): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2011-2012

水野 剛也
Takeya MIZUNO

はじめに 前編の要約と中編-1のねらい

本論文は、野田佳彦首相の在任期間中（2011年9月2日～2012年12月26日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌前号（第56巻・第2号、2019年3月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

本号に掲載する中編-1からいよいよ本題に入り、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）を質的に分析する。

本誌次号（第57巻・第2号）以降に掲載する予定の中編-2では『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）と「オフィス ケン太」（夕刊）、そして『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）を、つづく後編では『朝日新聞』の「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析するつもりである。

その後につづく結論では、それまでの分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌前号（前編）に掲載。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本誌前号（前編）に掲載。

3 新聞4コマ漫画が描く野田首相

本項では、野田首相を描いた作品を漫画ごとに質的に分析する。

・アサッテ君 (東海林さだお) 『毎日新聞』(朝刊)

『毎日新聞』の朝刊で連載されている「アサッテ君」(東海林さだお)は、平凡な会社員の朝手春男とその家族の庶民的な日常生活を、ときに時事問題に絡めて描く漫画である。朝手家は6人家族で、主人公・春男、妻・秋子、小学生の長男・夏夫、幼稚園児の長女・冬美、春男の両親・昼吉と夕子、からなる。作品の舞台となるのは主に彼らの家庭や職場である。連載を開始したのは1974年6月で、2003年11月に1万回を達成、2014年6月には連載40周年を迎え、さらに2014年8月には一般全国紙の4コマ漫画として最多連載記録を更新(1万3,616回)した。その後、2014年12月31日号をもって最終回となり、記録は1万3,749回で停止した。後継作品は「桜田です!」(いしかわじゅん)で、2015年2月1日号から連載を開始し、本論文執筆時点(2019年8月)でも1,500回を超えて継続中である。¹³

「モテない、カネない、度胸もない」主人公とは対照的に、作者の東海林さだお(本名・庄司禎雄)は長年にわたりめざましい活躍をつづけている漫画家である。1937年に東京都杉並区で生まれた東海林は、早稲田大学入学後から本格的に漫画を描きはじめ、大学を中退後、1967年に実質的なデビュー作である「新漫画文学全集」(『週刊漫画 TIMES』)の連載を手がけた。その他の代表作として、「タンマ君」(『週刊文春』)、「サラリーマン専科」(『週刊現代』)、「ショージ君」(『週刊漫画サンデー』)などがあり、食べ物に関するコラム「あれも食いたい これも食いたい」(『週刊朝日』)でも有名である。受賞(章)歴も多彩で、第16回文藝春秋漫画賞(1970年)、第11回講談社エッセイ賞(1995年)、第45回菊池寛賞(1997年)、紫綬褒章(2000年)、旭日小綬章(2011年)、などがある。2001年には「アサッテ君」で第30回日本漫画家協会賞大賞を受賞している。¹⁴

少なくとも小泉純一郎以降、「アサッテ君」は毎年、一定数の作品で必ず現役の首相を取りあげてきたが、その特徴は野田の在任期間中も継続して見られた。3大紙の漫画のなかではもっとも高い頻度と本数(1.13% = 439本中5本)で野田を描いている。¹⁵

上述のとおり、また本論文の前編でも指摘したように、首相を描く頻度・本数ともに「アサッテ君」が最高値を記録したことは、先行研究では一度も見られなかった注目すべき変化である。小泉から菅直人までは、「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊)が「アサッテ君」を一貫して上回っていたが(本論文前編・表2参照)、野田の在任期間中にはじめて両者の順位が逆転した。もっとも、表14を見ればわかるように、「アサッテ君」が突如として積極的に首相を描くようになった、というわけではない。むしろ、「地球防衛家のヒトビト」の数値が大幅に低下し、これまでの最低値(1.03% = 386本中4本)を記録したことが逆転の主因であり、「地球防衛家のヒトビト」がはじめて「アサッテ君」を下回ったと理解すべきである。

逆転現象が起きたとはいえ、小泉から野田までの7人全員を複数の作品で描いているのは、3大紙

の4コマ漫画のなかでは「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」だけであり（本論文前編・表2参照）、先行研究（本論文前編・後注4参照）が両者を「時事的4コマ漫画」と特徴づけているのも十分に首肯できる。この位置づけは、野田の在任期間中も依然として有効である。なお、同じ時事漫画でも、先行研究は「アサッテ君」を「世論反映型」、「地球防衛家のヒトビト」を「自己主張型」と区別しているが、この点についてはあらためて後述する。

表14 「アサッテ君」における首相を描いた作品の頻度と本数（首相別、上から頻度の高い順）

鳩山由紀夫	=2.70% (259本中7本)
麻生 太郎	=2.38% (335本中8本)
安倍 晋三（第1次）	=2.37% (337本中8本)
菅 直人	=1.56% (384本中6本)
野田 佳彦	=1.13% (439本中5本)
小泉純一郎	=0.87% (1,825本中16本)
福田 康夫	=0.59% (335本中2本)

「アサッテ君」において野田は、けっして「描かれやすい」首相ではない。頻度を基準に小泉以降の前任者と比較すると、表14が示すように中間からやや後方の7人中5位である。確かに、「アサッテ君」は3大紙の4コマ漫画のなかでもっとも頻繁に野田を描いてはいるが、かといって歴代の首相と比較して積極的に作品化しているわけではないのである。

「アサッテ君」における「描かれやすさ」を基準に7人の首相を大まかに分類すれば、2.00%を超える鳩山由紀夫・麻生太郎・安倍晋三（第1次、以下略）は上位グループ、1.00%を切る小泉純一郎・福田康夫は下位グループ、そして1%代の菅直人と野田佳彦は中間グループ、といえるだろう。参考までに、3大紙すべての4コマ漫画を合計した数値（0.45% = 2,208本中10本）では、野田は歴代でもっとも「描かれにくい」首相である（本論文前編・表3参照）。

次に、野田を描いた5本の作品の質的な分析に移るが、ここで参考になるのは、安倍・福田の作品を検討した先行研究である。そこで示されている類型化モデルは小泉の先行研究を微調整したもので、「アサッテ君」の首相描写をまず政治的な批評性・風刺性の濃淡により2パターンにわけ、両パターンをさらに現実の言動・フィクションという2つの要素により細分化する、というものである。麻生・鳩山・菅を扱った先行研究もこの分析モデルを採用している。

より具体的には、先行研究は「アサッテ君」の首相描写を以下の4パターンに大別している。

1 批評・風刺性薄い+現実

現実にあった首相の言動や政治・社会問題に関連させて首相を登場させるが、最終的には家庭内の些事など首相や政治問題とは関係の薄いオチやシャレに帰結させる。

2 批評・風刺性薄い+フィクション

パターン1と同じく政治とは関係の薄いオチやシャレにつなげるために首相を登場させるが、ここで示される首相の言動や政治・社会問題は現実のものでなく、作者がつくりだしたフィクションである。

3 批評・風刺性濃い+現実

現実にあった首相の言動や政治・社会問題に関連させて首相を登場させ、かつ主人公一家をはじめ一般庶民に皮肉っぽく首相を語らせる。

4 批評・風刺性濃い+フィクション

パターン3と同じく主人公一家をはじめ一般庶民に皮肉っぽく首相を語らせるが、ここで示される首相の言動や政治・社会問題は現実のものでなく、作者がつくりだしたフィクションである。

先行研究によれば、各類型は互いに完全に排他的でなく、1つの作品に複数のパターンが混在する場合や、どのパターンに分類すべきか明確に判断しにくい場合もある。

個々の作品を分析する前に、全体を見わたして目につく特徴は、5本の作品のほとんど(少なくとも4本)が現実の事象にもとづき首相を描いている一方、政治的な批評・風刺性は薄い、ということである。分類の内訳はパターン1(批評・風刺性薄い+現実)が1本、パターン1とパターン2(批評・風刺性薄い+フィクション)の混合が1本、パターン1を基調としパターン3(批評・風刺性濃い+現実)の要素が加えられているものが1本、パターン3(批評・風刺性濃い+現実)にやや近いものが1本、いずれのパターンにもあてはめにくいものが1本、である。パターン3の特徴が少なくとも2本の作品で認められるが、実際の内容を見ると明確な政治的メッセージが込められているとはいえず、全体として批評・風刺性は薄いといえる。

上述の特徴を同じ民主党の前任者2人と比較すると、「現実の事象にもとづき首相を描く作品が多い一方、政治的な批評・風刺性は薄い傾向がある」菅に近く、逆に「[すべての作品が]何らかの形で現実にあった首相の言動を題材」とし、かつ「批評・風刺性の濃い作品が過半数を占めた」鳩山とは明らかに異なる。現実の事象を題材としている点は3人とも共通しているが、批評・風刺性においては菅・野田と鳩山との間に大きなへだたりがある。鳩山の描かれ方について先行研究は、「発言や行動がそのまま漫画の題材にできるほど社会で注目を浴び、かつ批評・風刺しやすいものであったと考えることができる」という解釈を示しているが、菅・野田の言動にはそのような要素が比較的になかったのかもしれない。ただし、先行研究が指摘しているように、もともと「アサッテ君」で主流をなすのは批評・風刺性の薄い作品であり、菅・野田よりも鳩山の描かれ方のほうがむしろ特徴的であったと見るのが自然である。また、個々の作品の分析で明らかにするように、明確な政治的メッセージが込められていないからといって、必ずしも野田が好意的に描かれているというわけではない。

次に、野田を描いた5本の作品を上述の4類型に照らして分析すると、パターン1(批評・風刺性

薄い+現実)に該当するのは2011年9月2日号(No.12624、図1)の作品である。首相就任の当日、はじめて「アサッテ君」に野田が登場した作品である。まず、テレビ画面のなかに描かれている「わたしはどじょうです」(1コマ)という台詞は、民主党代表選(8月29日)の政見表明で実際にあった発言にもとづいている。そこで野田は、「どじょうはどじょうの持ち味がある。金魚のまねをしてもできない。どじょうだが、泥臭く、国民のために汗をかいて政治を前進させる」とのべ、その直後の決選投票で当選をはたしていた。「どじょうがさ 金魚のまね することねん だよなあ」という詩人・相田みつをの作品を引用したものである。しかし、作品はそれ以降、政治的な批評・風刺とは無関係の些細な家庭内のやり取りに終始している。現実としてあった野田の言動や政治・社会問題に関連づけて首相を登場させるが、最終的には非政治的なオチやシャレに帰結させるこの描き方は、先行研究が指摘するように「アサッテ君」が「もっとも得意とするパターン」である。

図1は、「アサッテ君」が「世論反映型」の「時事的4コマ漫画」であることを如実に示す作品でもある。一国の最高権力者に登りつめようとしている政治家が自身を地味な魚の代表格である「どじょう」にたとえた発言は、国内はもちろん海外のマス・メディアでも報道され、「どじょう」に関連する商品が売れるなど、新首相の人柄を示すエピソードとして社会的関心を集めたからである。本論文が定義する「首相を描いている作品」にはあてはまらないものの、「アサッテ君」はその後、さらに3本の作品で「どじょう」を題材としている。なお、本論文で順次記していくように、「どじょう」を作品に取り入れた作品は、同じ『毎日新聞』の「ウチの場合は」(夕刊)と『朝日新聞』夕刊の「地球防衛家のヒトビト」でも見られることから、多分に新聞4コマ漫画むきの発言であったと考えられる。¹⁶

さらに、図1はテレビ画面に映る首相を描いている、という点でも注目に値する。テレビや新聞などマス・メディアの報道を媒介して登場人物が首相について見知る・語るという構図は、先行研究が指摘しているように、「アサッテ君」以外でも広く見られる新聞4コマ漫

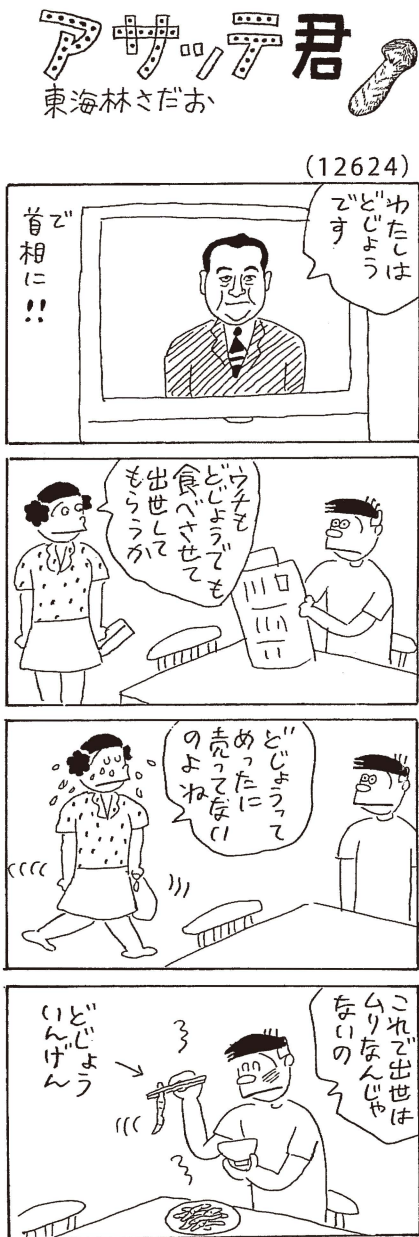


図1 2011年9月2日号(No.12624)

画特有の描写法だからである。実際、図1を含め野田を描いた5本すべてに同じ特徴(テレビ=2本、新聞=3本)が見られる。この点については、以後、それぞれの作品を分析する際にあらためて論及する。

パターン1(批評・風刺性薄い+現実)にパターン2(批評・風刺性薄い+フィクション)の要素が加わっているのが2011年11月3日号(No.12684、図2)の作品である。まず、新聞記事として描か

アサッテ君

東海林さだお

(12684)




図2 2011年11月3日号(No.12684)

れている「首相、記者の『ぶらさがり』取材拒否」(1コマ)は、現実としてあった首相の取材対応をさしている。この作品に先立つ10月3日、野田は視察に同行した記者団に対し、移動中などに立ったまま質疑を受ける「ぶら下がりという形でなく、会見方式のようなものをある程度の頻度でやっていきたい」と表明していた。ただし、作品は首相のその言動を批評・風刺するというよりは、主人公の春男に「自分でぶらさがるのは好きかも」(3コマ)と健康器具で体を伸ばす架空の首相を想像させることで、政治性の薄い展開にむかっている。野田の体型を皮肉っていると考えられるが、そこに政治的な含意は読みとれない。現実とフィクションが混在しているものの、最終的には非政治的なオチやシャレで終わる、「アサッテ君」らしい作品である。¹⁷

図2には、前述したマス・メディアの報道を通して登場人物が首相について見知る・語る、という構図も使用されている。図1ではテレビ番組が首相を伝えていたが、図2では新聞記事がその役割になっている。媒体こそ違え、マス・メディアを通してその受け手である一般庶民が首相の言動に接していることに変わりはない。

現実にあった首相の言動を題材とし、若干の政治批評・風刺を含んでいるが、最終的には非政治的なオチやシャレで終わる、つまりパターン1にパターン3(批評・風刺性濃い+現実)の要素が加えられていると考えられるのが2012年9月1日号(No.12965、図3)の作品である。まず、前半にはパターン3の要素が見られる。首相に対する問責決議案が参議院で可決(8月29日)されたという新聞報道(1コマ)を受けて、秋子の話し相手の女性に「なんだかケロッとしてるのよね」(2コ

マ）といわせることで、批判勢力を意に介さない首相を揶揄していると読める内容である。しかし、後半は一転して政治問題から離れてパターン1に切り替わり、靴をかじって怒られる飼い犬（4コマ）をさして秋子が「うちのもケロツとしての」（3コマ）と応じている。前半に若干の批評・風刺性は認められるが、最終的なオチで政治性はかなり薄まっており、全体としては図1・2と同じくパターン1を基調としていると見るべきである。なお、この作品でも登場人物たちは、マス・メデイ

アザラシ君 
東海林さだお

(12965)



図3 2012年9月1日号 (No.12965)

アザラシ君 
東海林さだお

(13023)



図4 2012年11月1日号 (No.13023)

ア(新聞)が伝える首相について語っている。

これまで紹介した3本とは異なり、パターン3(批評・風刺性濃い+現実)にやや近いと思える作品も1本ある。2012年11月1日号(No.13023、図4)の作品がそれで、新聞に掲載されている「首相所信表明演説(全文)」(1コマ)について、「こういうものをちゃんと読む人いるのかしら?」(2コマ)と尋ねる秋子に対して、春男が「それ取っという」「夜眠れないとき用にね」(3~4コマ)と答

える、という内容である。演説の具体的な内容に触れているわけではなく、首相に対する批評・風刺性が「濃い」とまではいいにくい。しかし、臨時国会の召集に際して野田が衆議院で所信表明演説をした(10月29日)のは事実であり、かつそれが長く退屈であることを揶揄していると解釈できることから、4類型のなかではパターン3にもっとも近いといえる。また、この作品でも「首相」という言葉が新聞紙面の一部として描かれている点には留意すべきである。

アサッテ君

東海林さだお

(12909)



図5 2012年6月22日号(No.12909)

野田を描いた5本のうち、最後に取りあげる2012年6月22日号(No.12909、図5)の作品は先行研究が示した4類型のいずれにもあてはめにくい、全体的に見れば前述した4作品と同じく批評・風刺性はさほど濃くないと判断できる。冒頭で昼吉がテレビ画面に映る首相を指さして「そうじゃないだろッ」「さっきいったことと話がちがうじゃないかッ」(1コマ)と怒りをぶつけているが、首相のどのような言動に対して抗議しているのか明確でないという点で、強い政治批評・風刺がなされているとはいいいにくい。その数日後の6月26日に民主・自民・公明党の賛成多数で消費税増税関連8法案が衆議院を通過しており、この動きが増税に触れていない2009年総選挙の民主党のマニフェストと「話がちがう」という意味かもしれないが、いずれにせよ推測の域をでない。しかも、作品の主眼はその後、夕子と友人の世間話に移り、最終的には「一爺が万爺ね」(4コマ)というダジャレで終わっている。1コマ目の昼吉の台詞が類型化を難しくしているものの、全体的には「アサッテ君」がもっとも得意とする政治性の薄い作品に近いといえる。

補足的に、他の政治家と対比・並列して首相を描く作

品が、野田の任期中は皆無であった点に触れておく。先行研究によれば、これは「自己主張型」の「地球防衛家のヒトビト」でよく採用される描き方で、麻生以降、「アサッテ君」でも定着しつつあった。たとえば、菅の在任期間中には、首相を仙谷由人官房長官・小沢一郎元民主党代表とともに描く作品があった。¹⁸

これまでの知見をまとめると、「アサッテ君」において野田は、同じ民主党の鳩山・菅と比べると現実の事象にもとづいて描かれる点では共通しているが、2人ほど「描かれやすい」首相ではなく、かつ政治的な批評・風刺の対象となる度合も低かったといえる。まず、現実の事象を題材としている作品が多い点は3人とも似ている。しかし、「批評・風刺性の濃い作品が過半数を占めた」鳩山とは明らかにへだたりがある。また、「政治的な批評・風刺性は薄い傾向がある」点では菅と類似しているが、野田の頻度・本数はともに菅のそれよりも低い。2009年の政権交代後、首相が交代するたびに、「アサッテ君」ではその存在感が希薄化しているといえる。

ただし、政治的批評・風刺性が薄いからといって、「アサッテ君」が野田を好意的に描いているわけではない点には留意しておくべきである。むしろ、部分的ではあるがパターン3（批評・風刺性濃い+現実）の特徴が少なくとも2本の作品で認められる。先行研究も指摘しているように、「首相を賛美・称賛するような作品は皆無」である点は、「アサッテ君」に限らず新聞4コマ漫画全体に共通する特徴の1つである。

上述のような野田の特徴にはさまざまな解釈が可能であるが、鳩山・菅の先行研究をふまえて理解すれば、国民から大きな期待を受けて政権交代をはたしたものの、徐々に勢いを失い、ついに自民党に政権与党の座を明けわたすことになった民主党それ自体の趨勢をある程度反映しているといえるかもしれない。先行研究は、鳩山の「描かれやすさ」の本質を「落差」、つまり、総選挙による政権交代で華々しい船出をしたものの、わずか8ヵ月後には支持率（朝日新聞社の世論調査）を10%台まで落とした末、突然に辞任したという、その急降下ぶりに見いだしている。そして菅については、「鳩山を引き継いだ菅は国民の期待感や失望の振幅が相対的に小さかった分、描かれる頻度も低く、また政治的に批評・風刺されることも少なかったと考えられる」としている。菅につづき野田が政治性の薄い描かれ方をしていること、かつ頻度では菅をさらに下回り、3大紙の4コマ漫画全体では歴代で「もっとも描かれにくい」首相となっていることは、政権交代以降の民主党それ自体の「右肩下がり」の党勢と呼応しているように見える。

関連して、党の低迷とともに作品内での首相の存在感も薄れていく傾向は、「アサッテ君」が「世論反映型」の時事的4コマ漫画であることを補強する有力な材料として見ることもできる。先行研究は「アサッテ君」について、「社会で話題となっている事象を積極的に取りあげているという意味で時事性が強く、世相を敏感に反映」し、それゆえに「世論と連動して首相の描き方に相当な柔軟性・可変性がある」と指摘している。野田を描いたほとんどの作品が現実の事象を扱っている点も含め、鳩山・菅・野田と戻つぼみになっていく民主党に対する社会一般の認識・評価を反映していると解釈することは十分に可能である。

野田を示すシンボル（画像・文字・画像と文字）に目をむけると、画像のみ＝2本、文字のみ＝1本、併用＝2本と、そもそも数が少ないとはいえ、大きな偏りはない。

表15 「アサッテ君」のシンボル使用（首相別）

	画像のみ	文字のみ	画像と文字（併用）
小泉	6本	9本	1本
安倍	4本	3本	1本
福田	1本	1本	0本
麻生	3本	2本	3本
自民党合計	14本	15本	5本
鳩山	5本	1本	1本
菅	1本	2本	3本
野田	2本	1本	2本
民主党合計	8本	4本	6本
全体の合計	22本	19本	11本

このことは野田に限らず、他の首相を含め全体に共通して見られる特徴である。「アサッテ君」で使用されるシンボルを首相別にまとめ、かつ所属政党ごとに合計値を算出した表15を見ても、首相・政党ごとに多少のばらつきはあれ、極端な偏りがあるとはいえず、かつ全体の合計値を見れば画像と文字はどちらもほぼ同程度に使われている（画像のみ＝22本、文字のみ＝19本、併用＝11本）。

もっとも、本論文の前編で論じたように、「アサッテ君」に限らず新聞4コマ漫画全体で見て、シンボル使用については依然として説明すべき余地が多く残されている。野田の後任者で自民党の安倍（第2次）についても、シンボル使用は継続的に考察していく必要がある。

最後に、先行研究に引きつづき本論文でも、マス・メディア報道の一部として首相を描く構図が多用されている点は注視に値する。野田が登場する5本すべてが、マス・メディアに報道される存在（テレビ＝2本、新聞＝3本）として首相を描いている。

「アサッテ君」では、小泉から野田までの7人全員が複数の作品でマス・メディアの報道対象として描かれており、首相を作品化する際の手法として定着しているといえる。他の漫画についても共通していえることであるが、新聞4コマ漫画において首相とは、第1・2人称的に描かれる人物ではなく、庶民の代表である主人公・登場人物の目線から、報道機関を経由して第3人称的に位置づけられる存在に近いといえる。

さらに付言すると、「アサッテ君」では新聞など印刷媒体がテレビなど放送媒体よりも多く使われる傾向がある。過去の首相では、小泉を描いた16本では新聞7本とテレビ1本、安倍を描いた8本では新聞3本とテレビ1本、福田を描いた2本ではテレビ1本、麻生を描いた8本では新聞が少なくとも1本（見方によっては2本）と雑誌1本、鳩山を描いた7本では新聞が2本、菅を描いた6本では

新聞が少なくとも2本（見方によっては4本）、であった。既述のとおり、野田を描いた5本では新聞3本とテレビ2本、であった。

先行研究がくり返し指摘しているように、マス・メディアを媒介させる描き方は「アサッテ君」以外にも広く見られる新聞4コマ漫画独自の特徴であり、本論文でも以後、折に触れて論及する。本誌次号以降に掲載予定の中編-2で扱う「コボちゃん」、そして後編で分析する「地球防衛家のヒトビト」（『朝日新聞』夕刊）にもテレビで伝えられる野田を描いた作品がある。

・ウチの場合は（森下裕美） 『毎日新聞』（夕刊）

『毎日新聞』の夕刊で連載されている「ウチの場合は」（森下裕美）は、主人公一家である大門家の面々が家庭・学校・職場などでくり広げる日常生活を描いた、きわめて家庭的な4コマ漫画である。大門家は、小学2年生のボク・ユウヤ、小学5年生の姉・アサカ、広告代理店に勤務する父親・バン、優しくおっとりした母親・キョウコの4人からなる。拾われてきた飼い犬のモアもいる。彼ら以外にも、ユウヤの親友の信一や担任の先生、近所の人々、バンの同僚や上司など、さまざまな人物が登場する。「ウチの場合は」は、2001年6月に休止した「まっぴら君」（加藤芳郎）を引き継ぎ2002年1月4日号から連載を開始した。麻生太郎首相の在任期間中の2009年4月10日号に2,000回、連載開始から10年目となる野田佳彦政権時の2012年11月8日号に3,000回を迎え、本論文執筆時点（2019年8月）でも4,900回を超えてなお継続中である。¹⁹

作者の森下裕美は、本論文が分析対象とする漫画家のなかでもっとも若く、新聞4コマ漫画以外でも広く活躍している漫画家である。1962年に奈良県でうまれた森下は、1982年に「英語教師」で第6回ヤングジャンプ青年漫画大賞に準入选し、同年、「少年」（『月刊漫画ガロ』）でデビューした。同じ年に『週刊少年ジャンプ』でも「JUN」を連載し、その後は4コマ漫画を中心に活躍するが、2000年代に入ってから『大阪ハムレット』（双葉社、2006～10年、2009年に映画化）、『夜、海へ還るバス』（双葉社、2008年）、『トモちゃんはすごいブス』（双葉社、2011～13年）、『なのなフォトゴロー』（双葉社、2014～15年）など、家族や人間関係を主題とした社会派のストーリー漫画にも取り組むようになった。「ウチの場合は」は、作者にとってはじめての新聞連載漫画である。その他の代表作に「少年アシベ」（『週刊ヤングジャンプ』、1991年にアニメ化）、主な受賞歴として第21回日本漫画家協会賞優秀賞（1992年）、第10回文化庁メディア芸術祭優秀賞（2006年）、第11回手塚治虫文化賞短編賞（2007年）、などがある。²⁰

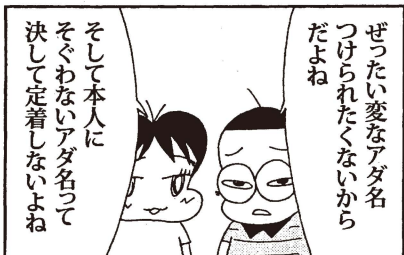
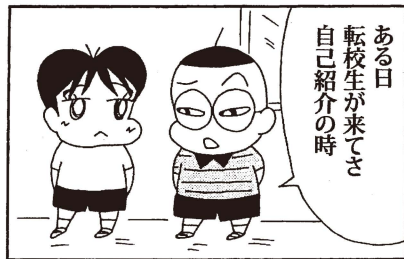
野田の在任期間中、「ウチの場合は」が首相を描くことは1度もなかったが（376本中0本）、このことは連載開始以来の作風を考えれば何ら不自然ではない。小泉も在任期間中を通じて1度も描いておらず（1,318本中0本）、ようやく安倍を1本（245本中1本=0.40%）で作品化したものの、福田（280本中0本）、麻生（275本中0本）、さらに3大紙の4コマ漫画全体で描かれる頻度ももっとも高かった鳩山（209本中0本）でさえも1度たりとも登場させず、昔も同じ（339本中0本）であった。つまり、小泉政権時に連載を開始してから野田が辞任するまでの約11年間で、本論文の定義に合致す

る方法で首相を描いているのは、実に安倍の1本だけなのである。²¹

先行研究がくり返し指摘しているように、「ウチの場合は」は家庭的な作風に徹し、政治家や政治問題をほとんど扱わない「純家庭的4コマ漫画」であり、連載を開始した小泉政権時からこの特徴がいささかも変わっていないことがわかる。本誌次号以降に掲載予定の中編-2で順次指摘するが、『読売新聞』（朝刊）の「コボちゃん」（468本中1本）、『読売新聞』（夕刊）の「オフィス ケン太」（71本中0本）、『朝日新聞』（朝刊）の「ののちゃん」（468本中0本）にも類似した特徴が見られる。

ウチの場合は

森下裕美
(2663)



「ウチの場合は」が「純家庭的」な漫画であることは、作者の森下自身もはっきりと認めている。2009年4月10日号で連載2,000回を迎えた際に、森下は連載のねらいをこう説明している。「タイトルにも表れているように、よそのウチに行くとなが家はまったく文化が違うことがありますね。読んだ人が『ウチの場合はこうだよ』と話したり、共感してもらえればうれしいです」。それから約3年半後、2012年11月8日号で連載3,000回を迎えた際にも作者は同様の発言をしており、さらに「なにげない日常が『ウチの場合は』のテーマ」だと語っている。誰もが「共感」できるような、ごく普通の家庭内のちょっとした出来事を描いていることがわかる。政治家や政治問題とは本質的になじまない漫画だといえる。²²

しかし、その「純家庭的」な特徴ゆえに、わずかに在任期間「外」ではあるものの、野田の存在を強く示唆する作品が1本あったことは注目に値する。この作品は、家庭漫画の首相描写について先行研究が示した仮説の蓋然性を考える上でも有用であるため、以下で内容紹介と若干の分析を試みる。その仮説とは、「ウチの場合は」のような家庭漫画で「首相が描かれるのは、政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど首相の言動が社会で注目され、大きなニュースとして（とくにテレビなどマス・メディアで）報道されている場合にほぼ限定される」というものである。つまり、政治家や政治問題をほとんど扱わない家庭漫画で首相が描かれるのは、マス・メディアでくり返し話題にされるなど、首相の言動がそれだけ社会全体で注視されている場合に限られる、というのである。

図6 2011年9月1日号 (No.2663)

2011年9月1日号（No.2663、図6）の作品がそれで、「ボクのコトはどじょうって呼んでくれ！！」（2コマ）と自己紹介する転校生の台詞、そして彼の背後の黒板に書かれた名前の一部「田よしひこ」（2コマ）から、前任者の菅から首相の座を引き継ぐことが決定していた野田をさしていることは間違いない。既述のとおり、野田は民主党代表選の政見表明（8月29日）で、「どじょうだが、泥臭く、国民のために汗をかいて政治を前進させる」と発言し、その直後の決選投票で当選をはたしていた。掲載日が首相に就任する前日である点を除けば、本論文が定義する「首相を描いている作品」に限りなく近い。特定の政治家を扱うことがほとんどない「ウチの場合は」では、きわめて希有な作品である。

政治家とはほぼ無縁なはずの「ウチの場合は」で近く首相となることが決定している人物が強く示唆されていることは、先行研究が示した仮説を用いれば無理なく説明できる。政界の最高峰に登りつめようとする政治家が自身を「どじょう」にたとえたことは、既述のとおり新首相の人柄を示すエピソードとして国内外のマス・メディアでくり返し報道されており、「政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼる」言動だといえるからである。なお、「アサッテ君」にも「どじょう」と発言する野田を描いた作品（図1）があったし、本論文の後編で扱う予定の「地球防衛家のヒトビト」にも同じく在任期間「外」ではあるが類似した作品が1本（2011年9月1日号）ある。家庭漫画にとって、そしてもちろん時事漫画にとっても、一国の最高権力者がみずからを「どじょう」と形容する意外性は、題材になりやすかったと考えられる。

もっとも、野田の在任期間中、「ウチの場合は」は現職の首相を1度も描いておらず、また図6はあくまで「首相になる予定」の人物を強く示唆しているにすぎないのであり、首相描写に関する仮説を考える上では「間接証拠」でしかない。「描かれない理由」を突きとめることは本質的に困難であるため、今後、「ウチの場合は」がいかなる作品で首相など政治家や政治問題を描くのかを注視しつつ、少しでも参考になる事例を積みあげていく必要がある。

最後に、あくまで参考事例ではあるが、本論文にとって論及に値すると思われる作品が野田の在任期間中に別に2

ウチの場合は 森下裕美

(2729)



図7 2011年11月22日号（No.2729）

本掲載されているので、以下でそれらの内容を簡潔に紹介する。

まず1つは2011年11月22日号 (No.2729、図7) の作品で、「野田」という言葉が出現するものの、パンの職場での些事を描いており、「ウチの場合は」としては典型的な内容である。まず、いつまでたっても社員の名前を覚えぬ部長が、部下の小泉を「野田!!」(4コマ) とよび間違えている

ウチの場合は 森下裕美 (2955)



が、「文字により直接的に野田首相に言及している」わけではないため、本論文が定義する「首相を描いた作品」にはあたらない。作品の内容全体を見ても、部長のとぼけた上司ぶりは「ウチの場合は」では類出する題材であり、政治的な要素はほぼ皆無の、通常の「純家庭的」な作風である。なお、部下が「小泉」姓である点についても、連載開始以来の作品群を通読する限り、小泉純一郎を意識していると推察できる材料は見いだせない。

もう1本、2012年9月12日号 (No.2955、図8) の作品は、拡大解釈すれば野田の存在を念頭に置いていると考えられなくもないが、もちろん本論文が定義する「首相を描いている作品」には該当せず、また内容も「ウチの場合は」らしい「純家庭的」なものである。もっとも着目すべきは、大人顔負けの知性を誇る信一の「政治家がよく政治生命かけるって言うけど なんの重みもないよね」(4コマ) という台詞で、野田はその約半年前の講演(3月24日)で「政治生命をかけて、命をかけて、この国会中に[消費税増税法案を]成立させる意気込みでがんばる」と発言していた。両者の結びつきを全否定することはできない。しかし、信一もそうのべているように、「政治生命をかける」という種の表現は野田に限らず日本の「政治家がよく言う」ことであり、少なくとも「首相を描いている」とはいえない。また、大局的に読めば、大げさで非誠実な政治家の決まり文句を皮肉するというよりは、小学生離れした言動をする信一が周囲を困惑させる、という「ウチの場合は」に類出する展開にそったもので、いつもの「純家庭的」な作品と判断すべきである。

図8 2012年9月12日号 (No.2955)

注

- 13 作者自身や漫画の登場人物については、以下の記事などが参考になる。内藤麻里子「朝刊4コマ漫画『アサッテ君』おめでとう、きょう1万回」『毎日新聞』2003年11月5日、内藤麻里子「読書日和 東海林さだおさん みみちく、まじめで大胆なショージ節」『毎日新聞』2011年6月7日夕刊、内藤麻里子「『アサッテ君』40周年 東海林さん『毎日夢中…3割打者でいい!』」『毎日新聞』2014年6月16日、内藤麻里子「きょうで1万3571回『アサッテ君』40周年 いいこと描き継いで」『毎日新聞』2014年6月16日、内藤麻里子「アサッテ君1万3616回 一般全国紙の漫画最長に」『毎日新聞』2014年8月1日、内藤麻里子「東海林さだおさん 40年間『アサッテ君』ありがとう」『毎日新聞』2014年12月19日、東海林さだお「また日本のどこかで」『毎日新聞』2014年12月19日、内藤麻里子「40年『よくやってきた』最終回、東海林さだおさん感慨」『毎日新聞』2014年12月31日。
- 「桜田です!」（いしかわじゅん）の連載開始については、「社告『桜田です!』新・朝刊漫画 いしかわじゅんさん作 来月1日スタート」『毎日新聞』2015年1月22日、内藤麻里子「桜田です! 『登場人物の動き楽しみ』新連載、いしかわさん意欲」『毎日新聞』2015年2月1日、が参考になる。
- 14 東海林の生い立ちや漫画家としての経歴については、東海林さだお『東海林さだお自選 なんたって「ショージ君」東海林さだお入門』（文春文庫、2003年）などが参考になる。
- 15 野田を描いた5本は、以下の号に掲載されている。2011年9月2日号（No.12624）、2011年11月3日号（No.12684）、2012年6月22日号（No.12909）、2012年9月1日号（No.12965）、2012年11月1日号（No.13023）。
- 16 「どじょう」を扱ったその3本は、以下の号に掲載されている。2011年9月4日号（No.12626）、2011年9月7日号（No.12629）、2011年10月1日号（No.12652）。「どじょう」が話題になっていることを伝える記事も多く、たとえば、次のようなものがある。「特集ワイド 誕生『どじょう』宰相 師・細川元首相もエール 泥まみれになれるか」『毎日新聞』2011年9月1日夕刊、「野田内閣『どじょう』新首相、期待と不安」『毎日新聞』2011年9月2日夕刊、伊藤智永「発信箱 どじょう占い」『毎日新聞』2011年9月6日、「ファイル 野田首相に金魚のようなどじょう贈る」『毎日新聞』2011年9月10日、「どじょう首相って? 大衆のでも農業に弱いよ」『朝日新聞』2011年8月30日、「どじょうに乗れ 相田さんの本増刷」『朝日新聞』2011年9月2日夕刊、「どじょう宰相 庶民の味 酒とどじゃれと1000円散髪」『朝日新聞』2011年9月3日。
- 17 「ぶら下がり実施せず 首相表明 随時記者会見開く」『毎日新聞』2011年10月4日。
- 18 なお、首相以外の政治家を単独で登場させている作品は存在する。2012年1月16日号（No.12755）と2012年4月29日号（No.12857）の作品は、資金管理団体の土地取引をめぐる裁判を受けていた小沢一郎を、2012年4月26日号（No.12854）の作品は、参議院で問責決議案が可決された田中直紀防衛大臣と前田武志国土交通大臣をそれぞれ描いている。
- 19 作者自身や漫画の登場人物については、次に示す新聞記事が参考になる。五十嵐英美「夕刊で好評連載『ウチの場合は』『大門さんち』を語る 森下さん」『毎日新聞』2002年2月22日夕刊、「夕刊連載4コママンガ『ウチの場合は』こんな人たちが大活躍」『毎日新聞』2003年6月24日夕刊、「森下裕美さん 4コマ漫画『ウチの場合は』2000回超え 創作の舞台裏」『毎日新聞』2009年4月15日夕刊、内藤麻里子「ウチの場合は3000回きょうも『ウチと一緒!』」『毎日新聞』2012年11月8日夕刊、内藤麻里子「ウチの場合は やりがい積み重ね3000回 森下裕美さんと振り返る」『毎日新聞』2012年11月9日。加えて、連載3,000回を記念して出版された森下裕美『ウチの場合は ベストレセクション 連載3000回スペシャル』（毎日新聞社、2012年）も有用である。
- 20 新聞4コマ漫画以外の森下の作品については、内藤麻里子「森下裕美さんが新作漫画『夜、海へ還るバス!』」『毎日新聞』2008年6月11日夕刊、内藤麻里子「Interview 森下裕美さん 普通に生きる努力描く『のななフォトゴロー』を出版」『毎日新聞』2014年6月11日夕刊、などが参考になる。
- 21 安倍を描いた1本は2007年9月22日号（No.1562）の作品で、その分析は本論文前編・後注4で示した水野・福田「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（中編）」でおこなっている。
- 22 内藤麻里子「『ウチの場合は』2000回」『毎日新聞』2009年4月10日夕刊、内藤麻里子「ウチの場合は3000回きょうも『ウチと一緒!』」『毎日新聞』2012年11月8日夕刊、内藤麻里子「ウチの場合は やりがい積み重ね3000回 森下裕美さんと振り返る」『毎日新聞』2012年11月9日。

【Abstract】

Prime Minister Yoshihiko Noda in Newspaper Comic Strips (Part 2):
An Analysis of Comic Strips in the Three Major
National Newspapers in Japan 2011-2012

Takeya MIZUNO

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Yoshihiko Noda during his tenure, from September 2, 2011 to December 26, 2012.

As the second installment of a multiple-part series, this article (Part 2) analyzes qualitatively how *Mainichi*'s "Asatte Kun" (Mr. Day-after-Tomorrow) and "Uchi no Baai ha" (In Case of our Family) depicted Prime Minister Noda.

In the later installments which are planned to appear in the upcoming issues, comic strips of *Yomiuri* and *Asahi* will be analyzed qualitatively, and conclusions will be presented.